

物語で学ぶ

【授業はむずかしいが、こんなに楽しいものもない】

以前参観した中学校1年生の道徳の授業である。資料は「片腕のラガーマン」、右腕がないラガーマンのデニスとチームメイトの友情の物語である。試合が終わった夕食会、ビーフステーキをナイフで切ることができないデニスを慮り、キャプテンのマイクを皮切りに、チームメイトが素手でビーフステーキにかじりつく場面を、授業者の先生は取り上げた。

「デニスに恥をかかせないためのチームメイトの思いやりの行為だ。」

「素晴らしい友情だ」などの発言が相次ぐ中、一人の女生徒が「これはデニスに対する嫌がらせだ。」と発言した。ナイフとフォークを使えないデニスへの当てつけの行為だと彼女は言い張る。思いもよらぬ発言に、先生は翻意を促すような発問をするが、彼女は意見を変えない。多くの参観者がいる中で、先生は丁寧な対応をしたと思う。しかし、結局彼女の意見は全体で検討されることもなく、チームメイトの行為は友を思う気持ちの表出であり、友情であるとまとめられ授業は終わった。

授業研究会では、この女生徒の発言については、あまり議論されなかったように記憶している。しかし、私はなぜあの女生徒は嫌がらせだと主張したのかが、気になってしかたなかった。

この授業は、読み物資料は使わず、2枚の場面絵で展開する。道徳では、副読本やプリント資料を読む、という固定化された意識を打破しようとする意欲的な取組である。1枚の絵は、ロッカールームでスパイクの紐をほどくのに苦労しているデニスを尻目に、次々とチームメイトが着替えて出ていく場面。そして、2枚目は、前述の夕食会の場面である。この2枚の場面絵から、生徒は様々に想像し、議論していく。先生の発問も的確だし、生徒の発言も素晴らしい。しかし、私はこの授業に「途中」が取り込まれることで、もっと生徒は考えが深まったのではないかと思う。それは、言葉をかえて言えば「物語で学ぶ」ということである。

2枚の場面絵は、文脈の中にあるのではなく、切り取られた場面である。その場面の間にはデニスとチームメイトの物語があるはずである。ある一つの行為は、文脈の中で検討することが重要である。ある行為のみをとりあげて議論するのではなく、その背景にはどんな物語があり、どんな文脈でそのことが行われたのか検討することにより、生徒の思考力や想像力は深まっていくものである。

このことを、日々学校で行われている授業に置き換えて考えてみたい。授業は教師と子どもが織りな

す物語であると思っている。同じ教材を用い、同じ計画で行われても、授業は一つ一つの教室で全く違う物語となる。そして、一人ひとりの子どもは、それぞれ違う物語の中にいる。しかし、スタートとゴールのみを示し、「できたか、できないか」の結果ばかりを教師が強く意識しているのは、子どもたちの物語は見えてこない。場面を切り取っているだけで、「途中」が省略されているからである。1時間の授業における子どもたちの物語を愛しお心を教師は持ちたいものだ。そういう教師の思いの中で、子どもたちは存分に自分の力を発揮し、学びを深めていく。また、教師も一つの授業の物語、一人一人の子どもの物語から学び、自分自身の物語を振り返り、そしてその物語を同僚と語り合うことを通して力をつけていくものではないだろうか。

「チームメイトの嫌がらせだ」と主張したあの女子生徒は、デニスとチームメイトの物語を知ったら、何と
言うだろうか。私の興味は尽きない。